

ブレーメンの町楽隊

DIE BREMER STADTMUSIKANTEN

グリム兄弟 Bruder Grimm

青空文庫

主人もちのろばがありました。もうなが年、こんきよく、おもたい袋をせなかにのせて、粉ひき所じよへかよっていました。さて、年をとつて、だんだんからだがいふことをきかなくなり、さすがにこのうえ追いつかうのがむりだとわかると、主人は、ここらでろばのかいぶちをやめたものか、と考えだしました。ところで、ろばは、さつそくに、こりや、ろくなことではないとさとつて、逃にげだして、ブレーメンの町をめぐあてに、とことこ出かけました。そこへ行つたら、町の楽隊がくたいにやとつてもらえようという胸算むなざん用ようでした。

しばらくあるくうちに、往來おうらいに一ぴき、りよう犬が、だるそ

うにころがつて、口ばかりあけて、はっは、はっは、あえいでいるのに出あいました。それはさんざん野山をかけあるいて、へとへとになっていいるというようすでした。

「おい、すたこら大将、なにをあつぷ、あつぷいつている。」と、ろばは声をかけました。

「いやはや、きいてくれ、こういうわけだ。」と、犬はいいました。「なにしろ年はとる、いくじがなくなる、おいらもむかしのげんきでりようば獵場をかけあるくわけにはいかない。主人は、それならいつそ、たたき殺してしまえということになった。あわてて逃げだしたというわけだが、さて、この先どうしてパンにありつか、じつはかんがえているところだよ。」

「ところで話だが、おいら、これからブレーメンの町へ出かけて、町の楽隊にやとってもらおうとおもうんだ、どうだ、おめえ、いっしょに行つて、いちばん、音楽でめしをくう気はないか。おいらリュウトをひくから、おめえ、カンカラ太鼓だいこをたたくがいい。」

りよう犬は、うん、よかろうというので、いっしょに出かけました。

それからあまり行かないうちに、ねこが一ぴき、往来にすわりこんだまま、それこそ三日も雨をくつたような顔をしていました。

「やあ、どうしたい、床屋とこやの親方、どうやらおひげの手入どころではないという顔つきだが。」と、ろばはいいました。

「いのちとかえがけというところだ。けいきのいい顔をしてもら

られまい。なにしろ年をとって来てね、齒はばくばくになる、ねずみのやつをおいまわすよりか、ろばたで香箱こぼこつくつて、ごろにやん、ごろにやん、のどをならしていたくなるさ。そこで、主人のかみさんが、いつそ水にはめておしまいよといいだした。そうされないうちに、とびだしては来たが、さていい思案しあんはないし、いったいどこへどう行ったものかと、あぐねているのだよ。」と、ねこはいいました。

「おれたちとなかまで、ブレーメンの町へ行けよ。おまえさんは、夜の音楽ならお手のものだろう、町の楽隊につかってもらえるぜ。」と、ろばはいいました。

ねこは、さっそくさんせいして、いっしょに出かけました。

やがて、三人組の脱走者だつそうしゃは、とある屋敷内やしきに來かかりました。門の上に、その家のおんどりがのつていて、ありつたけの声をふりしぼって、さけび立てていました。

「おい、骨のしんまで、じいんとくるような声を出すなあ。どうかしたのかい。」

と、ろばはいいました。

「なあに、あしたはいいお天気ですよって、知らせてやっているところだよ。」と、おんどりはいいました。

「なにしろ、けっこうなお聖母せいぼさまの日だ、おちいさいキリストさまの下着の、おせんたくして、ほしなすつた日だ。ところが、そのあしたの日曜日にちようびに、お客があるというんで、ここのおかみ

さんが、なさけ知らずにもほどがあらあ、女中の話だがね、それで、あすはおいらをスープにしてたべつちまうつてんでね、こん晩、さつそく、首をチョン切れといいつかつたよ。だから、せめて声のだせるうちとおもつて、おいら、のどのやぶれるほどわめき立てているんだよ。」

「やれやれ、なんということだい、赤ずきん、おれたちといつしよに行くがいいよ。ブレーメンの町へ出かけるところだ。ころされて死ぬくらいなら、すこしは気のきいた所が、どこへ行つたつてあろうじやないか。おめえはいい声しているから、なかまになつて音楽をながしてあるけ、いっぱしかせげるぞ。」と、ろばはいいました。

この申し出は、しごくおんどりの気に入りました。そこで、こ
んどは四人つれだつて出かけることになりました。

二

ところで、ブレーメンまでは、なかなか一日では行けません。
そのうち日がくれたので、森の中へはいつて、そこでひとばんあ
かすことにしました。

まず、ろばと犬とは、一本の木の下のにごろりと横になりました。
ねことおんどりとは、木の枝の上にやすみました。ところで、お
んどりはわざわざござえの先まで行ってとまりましたが、これが、

いちばんの安全な場所であつたのです。さてねようとするまえ、このおんどりはもういちど、東西南北、風のふく方角がどこかながめまわしたとき、ふと、むこうに、ちらちら火らしいものが見えたので、なかまに声をかけて、どうしても、そうとおくないとところに家があつて、あかりがついているらしいといつてしらせました。

ろばが、そこで、

「じゃあおれたち、ここをひきはらつて、もつと先まで行つてみようや。どうもこの宿は上^{じょうとく}等^{とう}とはいかないから。」と、いいますと、犬もそこへ行つたら、骨の一、二本、ことによると肉の香^{かおり}ぐらいかげようかとおもつて、さつそくさんせいしました。

こういうしで、四人組は、そのあかりのさしている方角ほうかくにむかつて、出かけました。するうち、あかりはずんずんはつきりしてきて、ぱあつとてりだしたとおもうと、そこはどろぼうの家で、中にはこうこうと灯ひがともっていました。

ろばは、なかまでいちばんのせいたかのつぽなので、窓のところまで行って、中をのぞいてみました。

「親方、なにかあったかね。」と、おんどりはたずねました。

「どうして、あったかどころのさわぎじゃないぞ。」と、ろばはこたえました。「ちゃんとテーブルごしらえがしてあって、けっこうなごちそうと、のみものが、山とならんでいるよ。どろぼうども、てんでに、はちきれそうな顔で、よろしくやっていると

さ。」

「そいつをものにしてようじゃないか。」と、おんどりはいいました。

「うん、うん、どうしたってわりこまなきやあな。」と、ろばはいいました。

そこで、まず、どろぼうどもを追っばらうには、どうすればいいかと、四人組の動物は、相そうだん談をはじめましたが、やがていいくふうがみつかりました。

ろばは、前足を窓にのせることになりました。犬は、ろばのせなかにとびあがることにしました。ねこは犬のせなかによじのぼることにしました。おしまいに、おんどりが、ばさばさととびあ

がつて、ねこの頭の上ののつかりました。いよいよしたくができあがると、一、二、三のあいずで、四にん組はいつせいに、音楽をやりだしました。ろばはひひんとわめきました。犬はわんわんほえたてました。ねこはにやおんとなきました。おんどりはこけこつこうと、ときをつくりました。とたんに、まどをつきやぶつて、一いちどう同へやの中へとびこみました、がらん、がらん、がらん、音をたててガラスはこわれました。

どろぼうどもは、びっくりぎょうてん、きやあとさけび声をあげてとびあがりました。たいへんな怪物かいぶつがとびこんで来た、そうとよりしか考えません。もうすっかりおびえきつて、てんでに、あたまをかかえて、そとの森の中へ、にげだして行きました。

そこで、四人組は、ゆうゆうテーブルにつきました。ごちそうは、のこりものでも、がまんすることにして、それでも、これからあと四週間ぐらい断食だんじきしてもいいといういきおいで、つめこめるだけ、たらふくつめこみました。

三

さて、四人組の楽隊なかまは、おなかができると、あかりをけして、めいめいのうまれつきとすきずきにまかせて、いいぐあいの寝床ねどこをさがして休みました。ろばはそのつみごえの上ねまにねました。犬は戸のかけにねました。ねこはへつついの上で、灰のぬ

くみをさがしてねました。おんどりは、とまり木のかわりに、屋根うらのはりの上にのりました。なにしろ、みんな遠道をして来て、くたびれていましたから、もうさっそくに、ぐっすりねつきました。

真夜中をすぎたときに、どろぼうどもが、とおくからみますと、うちの中にはあかりがともっていない、中はひっそりかんと、しずまりかえっているようでした。

「どうもおれたち、おどかさされて、にげだしたといわれちゃあ、がまんできないぞ。」

おかしらはこういつて、ひとり手下てしたにいいつけて、ようすをみせにやりました。

さて、いいつかつた手下がはいってみると、家の中はどこもひつそりしていました。そこであかりをつけてみようとおもって、台所へ行きました。すると、やみに光っているねこの目だまを炭^す火^{みび}とまちがえて、いきなりマッチをつっこみました。ところが、ねこのほうは、おやすいご用とうけてはくれず、ううう、とたけりながら、顔にとびついて、めつたらやたらに引つかきました。

いやはや、おどろいたのなんの、手下のどろぼうは、したたかにやられて、びっくり、はいもう、うらの戸口から逃げだそうとしますと、そこにねていた犬が、とびあがって、むこうずねにかみつきました。そこで、庭へかけだして、つみごえのそばをかけぬけようとしみますと、ろばがあと足でしたたかに、けとばしまし

た。すると、このさわぎで目をさまさせられためんどりが、はりの上から、はしやぎきつて、ひと声、キケリツキー、とどなりました。

どろぼうは、いのちからがら、足にまかせてにげだして、おかしらの所へかえりました。そうしてこういいました。

「どうもはや、たいへん、あの家には、すごい魔物まものがはいりこんでいて、いきなり、きみわるく、ふうう、と息をふっかけて、ながい指で顔をひっかきました。それから、戸の前にはひとり、男が待ちぶせていて、小刀をすねにつきたてました。庭へ出ると、なんともえたいの知れない、まっ黒なばけものが立っていて、こんぼうをふつるて、したたかなぐりつけました。その上、たかい

所には、ちゃんと裁判官さいばんかんがひかえていまして、さあ、そのわるもの、ここへつれて来い、とどなりました。いやもう、さんざんのていたらくで、まつくらさんぼう逃げて来ました。」

それから、どろぼうどもも、こりて、二どとふたたび、この家にはいろいろとはしませんでした。ところで、ブレーメンの楽隊なかま四人組も、ひどく、ここが気に入ったので、それなりもうよそへ出て行こうとはしませんでした。

さて、これまで申したことは、ついこないだ、それこそ湯気ゆげの立つほやほやの口からきいたお話ですよ。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ブレーメンの町楽隊

DIE BREMER STADTMUSIKANTEN

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 グリム兄弟 Bruder Grimm
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>